

わたなべうんせん

【渡辺雲儼】

(その三)

生誕120周年の企画展「雲儼展」見学と

ある耶馬溪画の現地探訪

山崎 達夫

◎前回まで2回にわたり「渡辺雲儼」に関して紹介してきた。楠会長の厚意により、引き続き掲載の機会を得たので、もう少しお付き合い願います。

◆はじめに

「渡辺雲儼」は神田屋という造り酒屋の次男である。長男の文友氏は矢野町の助役を務めた方であり、矢野町史の編纂にもかかわった人であった。そのため矢野町史をひも解くと、彼の名前や、旧家である渡辺家の古い資料などがよく引用されて出てくる。また、「矢野町史下巻」の酒造業についての記載のなかに、渡辺家は江戸時代から続く醸造元で、銘柄として「千歳の鶴」「神命酒」「水引」などが記載されている。「矢野町史上巻」には、近世の矢野の文化を紹介した「和歌」の説明のなかで、当時矢野で和歌をたしなんだ歌人の句が紹介されている。そのなかに渡辺家の先祖の人と思われる「渡邊正任」という人の和歌が数

種紹介され、「号」と思われるものを名乗った「渡邊嘯月

正任」という名や、俳諧の説明のなかにも「渡邊氏嘯月子」と書かれた名の記載がみられた。以上のことから、

しょうげつあんうんせん

「嘯月庵雲儼」という「号」は、「渡邊正任」氏の「号」

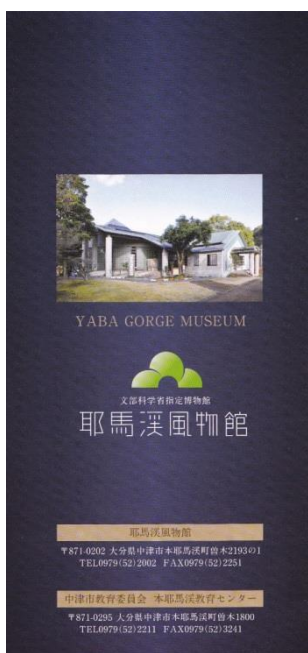
が由来であると推察できる。また、矢野小学校の前身である長慶寺の寺子屋の名が「啓迪舎」であり、これが「渡辺

雲儼」の最初の「号」である「啓迪」けいてきの由来であるとも考

えられる。

渡辺家は旧家であり、長兄の文友氏は矢野町の町政にかかわっていたことなどを考えると、当時の文友氏の周辺におられた方々のなかには、「渡辺雲儼」のことを知っていた方も多くいたと思われる。大正13年に矢野町に帰郷され、比治山の麓である広島市東段原町にしばらく住まれていた。しかし、その後所縁の地である耶馬溪の近くの大分県中津市へ住居を移された。このようなことが矢野町と疎遠となり、絵馬の存在とともに忘れ去られていった一因と考えられる。矢野町において、尾崎神社の絵馬を描いたという事実と、実兄文友氏は町政に深くかかわっていた人だということを考えあわせると、矢野町との関係は深かったのである。

以下、「雲儼展」で見学した作品の一部を紹介します。



耶馬溪風物館しおり



耶馬溪周辺図

◆「雲僊展」——耶馬溪風物館——



耶馬溪風物館入口



ポスター

中津市を含む大分県周辺では多くの作品が残され、評価もされている。偶然にも、私が「渡辺雲僊」の孫娘さんと知りあった年に、中津市の「耶馬溪風物館」において、生誕120周年没後40周年記念の、「雲僊展」という作品展が開催されていた。勧められるまま中津市へ出かけ、館長、「渡辺雲僊」研究家、それに孫娘さんたちの解説を聞きながら見学した。

◆ 展示作品の一部







◆ 耶馬溪画（念仏橋）の現地探訪

耶馬溪には66の景勝地にそれぞれ名称がつけられている。第6景として「青の洞門」で有名な「競秀峰の景」があり、代表的な場所として一目八景という景勝地もある。第48番に「念仏橋の景」というのがある。今回その場所を案内してもらった。「念仏橋」という画題の掛け軸と比べてみると思ったからである。時代が大きく経過した現在では、当時の「渡辺雲僊」が目にして描いた「念仏橋」の景観とは、大きく変化していると思っただけだが、想像にたがわずであった。しかし、そのことは別にして、紅葉が真っ盛りであったため、大変美しい景色であった。画題となった場所に赴き、景色を見てみるのも一興である。

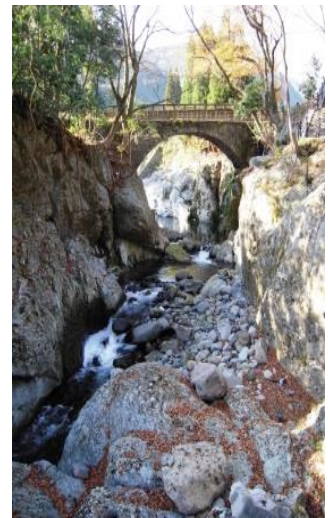


魔林峽

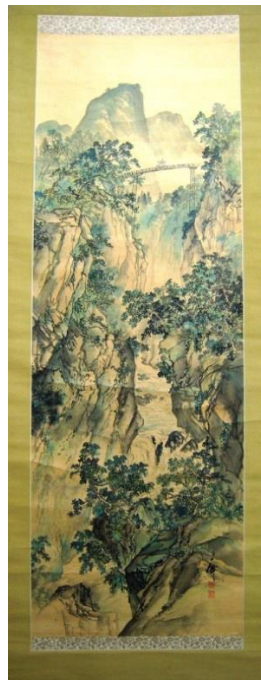


念仏橋

魔林峽の上流に明治10年寺の住職が私財を投じて木橋を架けたが、たびたび流されたため、昭和3年に石橋アーチに架け替えられた。



現在の念仏橋



掛け軸：念仏橋

- ◎ 本誌に掲載の場と多くの助言を頂いた楠精洲会長に感謝します
- ◎ 参考資料 広島県矢野町史（上巻・下巻）
- ◎ 筆者紹介

- ・ 祖父・父ともに昭和三二年まで矢野町砂原で山崎医院開業
- ・ 昭和二五年 矢野町砂原で出生 菊水幼稚園第一回卒園